

病む子の祭

新美南吉

青空文庫

母

長男

長女

次男

三男（病氣の子）

岡^{おか}のふもとの竹やぶにかこまれた小さい家。

母親が子どもたちに祭の晴着^{はれぎ}をきせている。

花火の音。笛、太鼓^{たいこ}のゆるやかな、かすかなはやし。

母

よごすんじゃないよ。いつもの着物とちがうんだからね、土塀^{どべい}にもたれたり、土いじりしちゃいけないだよ。それから、袖^{そで}ではなをふいたりしないでね。ふとこ
ろから鼻紙を出してはなをかむんだよ。

長男

ごわごわするなあ、この着物。

母　いい着物だからさ。ほらいいにおいがするでしょう。

長男　薄荷^{はっか}みたいにするってするね。ぼくなんだか、心が軽くなったみたいだ。わくわ

くするなあ、さあ早くいこうよ。

母　そんな大きな声をたてるんじゃないよ、よし坊が目さますから。よし坊が目

さましたら、またつれてつてくれつてきかないから。

長女　おつかさん、よし坊がなにかいってますよ。むにやむにやって、目をつむつたま

ま、いってますよ。

母　目をさましたのかしら。そうじゃないわ。なにか夢^{ゆめ}でもみたのよ。

長女　なんの夢、みたんでしょう。病気がなおつて、たこをあげてる夢かしら。よし坊

は、しょっちゅう、たこをあげたいっていつてたから。

長男　それからね、こまもまわしたいって、いつてたよ。

次男　きのうぼくに、竹馬^{たけうま}にのりたいって、いつてたよ。

長男　ぼくたちがすること、よし坊は、なんでもしたいんですよ。病気のくせしてね。

かあさん。

母　よし坊は、みんなといつしよに、なんでもしたいんですよ。

長女

そうよ、かあさん。学校へもいきたいんだって。よし坊をよくいじめた酒屋の三ちゃんがいともいいのつてきいたらね、三ちゃんがいとも、学校へいきたいつて。もう三ちゃんは、よし坊をいじめやしないつてき。

次男

そんなことあるもんかい。三太はだれでもいじめるんだよ。ぼくたちは同級だからいじめないけど、年下のものならだれでもなかすんだ。帽子をとりあげたり、堤^{とて}の根方^{ねかた}におしついたり、するんだよ。

長女

でもね、よし坊は栗^{くり}の実をポケットにいっぱい持つてつて、三ちゃんに、もういじめないでねつて、あやまるんだつてき。よし坊はとても外に出たがるのね。

母

そう、外でみんなと遊びたいのさ。でも病氣だからいけないのですよ。病氣がこの子にとりついていて、いかせないんですよ。病氣つてどうしてこんな罪もない子にとりつくのでしょうか。

長女

おかあさん、よし坊はずいぶんやせたね。手なんかむぎわらみたいね。

長男

頭もあや子のゴムまりくらいだ。

次男

きのう、帽子がかぶりたいつていったからね、ぼくが柱からはずしてきてかぶせてやつたら、すこすこしてたよ。目までかぶさつちやつて、とてもおかしいんだよ。

母　さあ、たあちゃんは今もうこれでいいのよ。こんどは、あや子。あや子にはどの着

物がいいかね。

（たんすをあける）

長女　あたしは、唐^{とう}ちりめんがいいわ。ほら、つばきの花の。

母　つばきの花のつて？

長女　おとうさんのお葬^{そうしき}式^{しき}とききたのよ。あたしよくおぼえててよ、こっちの肩のところに、つばきの花がふたつかさなつてたわ。こうするとよく見えるのよ。花のにおいがかげるくらいのそばに。

母　ああ、これだね、まだきられるかしら。

（女の子きる）

母　すこし短いわね。むりもないね、あれから、もう四年になるんだから。

長女　これよ。あたし、この着物とても好き。ほらね、かあさん、この肩^おんところに花があるでしょう。お葬^{はか}式^{しき}でお墓^{はか}にいったときにね、あたしが叔父^{おじ}さんや叔母^{おば}さんたちの間で立つてたら、白^{しろ}いちようちようが舞^まつてきて、あたしの肩のこの花にとまったのよ。あんどきあたし、おとうさんがなくなつて、悲^{かな}しくつてないてたわ。

母　こっちいおいで。ぬいあげを下ろしてあげます。おや、なにか落ちましたよ。ねずみのふんみたいなものが。

長女　あらいやだ。それ、おしろいの実よ、おかあさん。

母　どうして、そんなものがはいってたの。

長女　おしろいの実をしまつとくとね、色が白くなるんだって、みんながいうんですよ。

母　おやおや。

長女　それから美しくなつて、みんながお嫁よめさんにもらいにくるんだって。

母　あきれた子だね。

次男　あんなこと、うそだね、かあさん。鯉こいちゃんとのねえさんはね、まえだれにいつぱいあつめてつたけど、ちつとも白くならないね。いまでもまつ黒だ。

母　どこでそんなに、おしろいの実をとるの。

長男　めくらのおじいさんの庭から、とつてくるんですよ。おばあさんがいるときはね、^{ひばし}火箸ひばしを持って追つぱらうもんだからね、ばあさんがいないときに、女の子たちは、とりにいくんです。

長女　あら、あたしはそうじゃなくつてよ。あたしは、おキンちゃんのとこでいたい

たのですよ。

長男

あや子のこといつてやしないよ。他の子のことだよ。そうするとね、かあさん、おじいさんは目が見えないでしょう。だからみんなが、おしろいの実をとつても知らないで、犬が庭にはいったかなつて、いつてるんですよ。

長女

あたしは、そんなこと一ぺんもしやしないわ、かあさん。

母

そんなこととしてはいけませんよ。でも女の子つて、そんなに色が白くなりたいのかしら。(笑う)

(このとき、次男の着つけも終わる)

(花火の音がする)

長女

あら、びつくらした。

次男

でかいなあ、いまのは、二尺かもしれないよ。

長男

地ひびきがしたよ、表のつばきの花が落ちたよ。

長女

あたし、こわいわ、花火なんて。みぞおちのところがドキドキするわ。

次男

臆病だよ。すずめみたいだよ。さつき表で見たらね、かあさん、すずめが花

火のはじけるたびにとびたつて、裏山の方へ逃げてつたよ。もう村には、一わもい

やしない。

長男

さあいこうよ。かあさん、おこづかいは。

母

さあ、たあちゃん、次郎ちゃん、あやちゃん。みんな二十銭ずつですよ。落とさないように、気をつけてね。花火やなんかつまらないものや、氷のものは、買っちゃいけませんよ。

次男

かあさん、ぼく、靴にあながあいてるから、よし坊のをはいてっていい？

母

もうあんたは、あなをあけちやつたの、まだ、こないだ買ったばかりじゃないの。だって、あながあいちやつたんだもの、ぼく知らないや。

母

うそおつしやい。なにかわるさしたんでしょ。あなたの顔に書いてあります。うそをいう子は、顔が赤くなるからすぐわかります。さあどうしたか、いってごらんなさい。

次男

けんちゃんがわるいんだよ。

(泣きだす)

母

ないてもゆるしませんよ。さあ、男の子はなんでも正直に、男らしくいうもんです。

次男　けんちゃんがレンズを持ってきて、黒いもんなんなんでも燃えるから、やってご

らんっていったから、ぼくうそだと思つて……。

母　それごらんなさい。あなたは、そんなことをするんです。

次男　だって、けんちゃんが……。

母　そらまたもうひとつ。あんたはわるいことをしたうえ、ひとに罪をなすりつけるのね、ふたつもよくないことをしたんですよ。そんな子はもう、おかあさんの子じゃありませんよ。

長女　ごめんなさいって、あやまりなさいよ、次郎ちゃん。

次男　かあさん、ごめんなさい。

母　もうこれから、そんなことするんじゃないよ。お家は^{うち}お金持じやないんですからね。まずしいお家では、みんなが、品物をだいじに使わなきゃ、いけないんですよ。

長男　おそくなるからもういこうよ。もうみんな、お宮へいつてるよ。

母　よし坊ちゃんのお靴^{くつ}、おまえにはけるのかい？

次男　うん。

母　じゃあ、あれをはいてらっしゃい。

長女　あ、よし坊が目をさました。

（みんな病氣の子の方を見る。沈黙）

三男　にいちちゃんたち、どこへいくの？

（母親、目顔で祭にいく子どもたちにだまっておいでと命ずる）

母　にいちちゃんたちはね、学校で式があるので、いかなきゃならないんですよ。

三男　うそいつてら。

母　うそじゃありませんよ。お昼からね、校長先生のお話があるのさ。

三男　かあさん、うそいつてるよ。顔見ると、ちゃんとわからあ。

母　あら、この子は。

三男　ぼく知つてら。にいちちゃんたち、祭にいくんだよ。ね、そうでしょう。ぼくいま夢ゆめを見たの。去年の祭にきた猿さるまわしとね、ぼく、菜種畑なたねの中でいきあつたの。去年はね、お猿が一ぴきりだったでしょう。今年はね、そのお猿と赤ん坊の猿と二ひきできてるの。ぼくが菜種の花をちぎってなげてやったら、大きな猿が、とてもじょうずにうけとつてね、小さいお猿に半分ちぎってやって、パクパクたべてった

よ。

母　そう、それはよかったね。にいちやんたちはじき帰ってくるからね、よし坊ちやんはかあさんとお家で待っていていましょうね。

三男　いやだい。ぼくもいくんだ。

母　そんなこと、いうもんじゃありません。起きちやいけませんよ。お医者さんがおつしやつたでしょう、じつとしてなきや、病気はなおらないって。

三男　いやだい。ぼく見たいんだ。猿さるまわしやお芝居しばいが。

母　お病気がなおったら、町へつれてつて映画を見せてあげるから、きょうはおとなしくかあさんと待ってましようね。そのかわり、ねえちゃんにいいものを買ってきてもらいましよう。よし坊ちやん、なにがほしいの。

長女　絵本買ってきてあげましようか。

三男　いやだい、ねえさんのほか。

母　そんなにあばれちやいけません。お腹なかがまたいたくなりますよ。さあ、おとなにしましようね。

次男　もういこうよ。

(靴をはきかかる)

三男 あ、次郎ちゃん、ぼくの靴くつをはいてる。いやだい、いやだい。ばか、ばか。

母 あのね、よし坊ちゃん、あんたにはもつといいのを、買ったげるからね。

三男 いやだ、いやだ。次郎、ばか。かあさんばか。みんなばか。

母 そんなにさわいいじゃいけません。ほうらごらん、こんなに汗ひたが額たいに出て。顔が青くなりしましたよ。次郎ちゃん、じゃあきようは、あんたのお靴くつはいてらっしゃい。

次男 だって、よし坊はもうはかないんじゃないの。

三男 次郎ばか、次郎ばか。

母 あんたまで、そんなことをいうのね。みんなでかあさんをいじめるんだわ。いいよ、かあさんをそんなにいじめると、早くしわがよっておばあさんになって、死んじゃうから。

次男 ぼく、そんならじぶんのをはいてくよ。さあいこう、にいさん。

母 危あぶないとこへいくんじゃないよ。花火やよっぱらいのそばにいつちや、いけませんよ。そして、暗くならないうちに帰ってくるんですよ。

長男次男 うん。

長女

じゃ、よし坊ちゃん、いいもの買ってきたげるから、待ってらっしゃいね。

三男

やだい。ねえちゃんもいくの。ねえちゃん、いっちゃいやだ。

長女、戸口のところで思案する。

長男、次男、出ていく。

母親、身ぶりでいきなさい、と長女に命ずる。

長女出ていく。すると、病氣の子がまた「いやだ、ねえちゃんいっちゃいやだ」とさけぶのでいきかねている。

母は早くおいきと身ぶりで示す。ついに長女はすがたを消す。

病める子、急になきだす。

母

さあ、なかないで、よし坊。ねえさん、じき帰ってきてくれるからね。おまえは、いい子だから、かあさんのいうことをきくんですよ。さあ、おとなしくねんねしましょう。そのうちにおはやしが、この辺までやってきますからね。いいでしょう、よし坊、おまえのすきな笛や太鼓たいこがやってきますよ。

三男 うそだい。おはやしなんかここまできやしないや。塩屋さんとここまできて、あそ

こからまた帰っていつちやうんだ。ぼく去年ついてきたからよく知ってら。

母 おや、そうかい。でも塩屋さんとこまでくれば、おはやしの音がよくきこえるから、いいじゃないかい。大太鼓の音が、どうんどうんてお家の障子しょうじにひびいてくるよ。いいでしょう。

三男 かあちゃん。

母 なんだい。

三男 ぼくにも、祭の着物をきせてくれよ。

母 おまえさんは祭にいかないじゃないの。

三男 ぼくも祭の着物がきたいや。にちやんたちみんながきたんだもの。

母 そうかい。それじゃ、よし坊ちゃんにもきせてあげようね。

（母親、たんすから一枚の晴着をとり出す）

三男 それじゃないよ。そんなの学校にあがったとききたんだよ。

母 おや、かあさん、忘れっぽいね。ではこれだね。

三男 うん。

(母親をかえさしてやる)

三男 かあちゃん。

母 なにさ。そんなにしげしげと。

三男 子どもがおとなになるってほんと？

母 ほんとですよ。みんながどんどん大きくなって、おとなになるんですよ。

三男 おかしいなあ。

母 おかしありませんよ。よし坊ちゃんも、にいさんやねえさんたちも、おとなになるんですよ。

三男 いつのこと？

母 まだ十五年も二十年も先のことさ。

三男 いくつねるの？

母 さあ、千も万もねるんでしよう。

三男 おかあさんは、はじめからおとな？

母 おかあさんだって、はじめは子どもだったんだよ。おねえちゃんみたいだったときもあるし、もっと小さな赤ん坊だったこともあるのさ。

三男 一つのこと？

母 ずっとむかしのことさ。

三男 ふうん。おかしいなあ。かあさんは、はじめからおとなじゃなかったの？

母 そんなことありませんよ。どこのおかあさんでも、はじめは赤ん坊で、それから子どもになって、それから娘さんになって、それからお嫁にいつて、それから子どもをうんで、そして、おかあさんになるのさ。

三男 (じぶんの腕を見て) ぼく、おとなになれるかしら。ぼく、おとなにならないよ。そんな気がするんだもの。

母 なれますよ。いまに、大きくじょうぶになりますよ。

母 (長女だまっではいつてきて戸口で立っている)

母 おや、あやちゃん、いかなかったの？

母 (長女うなずく)

母 なにか忘れたの？

母 (長女、首を横にふる)

母 どうしたのさ。びつくりしたみたいに目を見はつて。

長女 あたし、鐘撞堂かねつきどうの下んところから、帰ってきたの。

母 こっちへ、おいで。戸口のとこになんか立っていないで。まあ、どうしたのさ、息なんかきまして。どうして鐘撞堂のところから帰ってきたの？

長女 あたし、なんだか知らないわ。なんだか知らないけど走ってきたの。鐘撞堂のところまでいったら、一ぺんで帰りたくなったの。

母 へんな子だね。じゃあ、もうお祭にいかないの。

(女の子うなずく)

母 せっかくあそこまで行って、帰ってくることもなんかないじゃないの。あそこからもうじき、お宮さんじゃありませんか。あとでいけばよかったって、知りませんよ。

長女 いいのよ、おかあさん。

母 それじゃあ、そんなとこに立っていないで、こっちへいらっしやい。(病氣の子どもに) よし坊はもうお薬を飲まなきやいけませんね、まだあったかしら。おや、もうからですね。それじゃあ、かあさんがお薬をとってきますから、よし坊ちゃんはねえさんと遊んでるね。

(長女あがつてきて、よし坊の枕まくらもとにすわる。母、用意をする)

三男 かあさん、近道していくといいよ。

母 近道つて？ おまえお医者さんのお家へいく近道知ってるの？

三男 井戸車のある家と、めくらのじいさんのお家の間をとおっていくとね、杉すぎの垣根かきねにあながあいてるからね、そこをくぐると、お医者さんちの裏だよ。垣根をくぐったときにね、頭に気をつけないと、物置からさがってる樋とにぶつかるとよ。

母 あきれた子だね。そんなとこをくぐって遊んだのかい。おかあさんは、そんなところはとおれませんかよ。

三男 あそこからいくと、とても早いや。

長女 あそこはもうとおれないのよ。井戸車のお家とめくらのじいさんちの間に、私たちの垣根を結んじまったから。よし坊ちゃんはまだ長い間見ないから、知らないんだわ。

母 ではいつてきますよ。

三男 かあさん、お医者さん家のかどんとこで、去年の綿砂糖わたざとうのおじいさんが売ってたら、買ってきてね。

母 綿砂糖つて？

三男 綿みたいになった砂糖だよ。

母 そんなものを、おまえはたべちゃいけないですよ。かあさんが、卵を買ってき
ておいしく煮てあげるからね。

（病気の子、このあたりから力が衰える）

三男 卵なんて、しょっちゅうたべてるんだもの、いやだい。

母 じゃ、お医者さまにきいてみて、たべていいっておっしゃったら、買ってきまし
ようね。

（母親裏口から去る）

（花火の音）

三男 いまの花火、きつと旗が出たよ。

長女 見てきましようか。

（長女縁側^{えんがわ}に出て空をあおぐ）

長女 あら、ほんとうに旗が出たわ。雲の下を、北の方へ流れていくわ。……ああいま、
学校のうしろの山の上ころよ。あら、山のとっぺんで、だれかが旗の方に手をふつ
ててよ、……もう見えなくなっちゃった。

三男 山の上にだれがいるの？

長女 だれだかわからないわ。

三男 先生じゃないの。

長女 見えやしないわ、そんなことまで。

三男 だめだなあ、おねえさんの目なんか。

(女の子、枕もとにすわる)

三男 旗は、どこまでとんでくかなあ。

長女 やた村に、きつと落ちるわ。

三男 やた村で落ちないで、もつとどんどんでつたらどこへいくんだろう。

長女 知らないわ、そんなこと。

三男 どっかの黒い海にいくよ。

長女 そうかしら。

三男 だめだなあ、おねえさんなんか。なんにも知らないや。

長女 知ってるわ、あたしだって。

三男 知らないや。

(沈黙。すぐ近くでひばりが鳴きはじめる)

三男　くにちゃんとこでもらった雛ひなを持っておいでよ。

長女　どうするの？　よし坊ちゃんかねてる間に、もう餌えをやつといたわよ。

三男　もってこいよ。

長女　もってきてどうするのさ。にいさんたちに見つかると、とりあげられちゃうわよ。
三男　にいちゃんたち、祭にいつてら、ばか。

三男　(女の子、裏口から出ていつて、すぐボール箱ばこを持ってはいつてくる)
箱はこから出して、ぼくの手にのせてくれよ。

長女　だめよ、そんなことしちや。まだ弱いんだから、手にとったら死んでしまうわよ。
三男　いいんだつたら。

長女　いやよ。あたしがくにちゃんとこのおじさんにいただいてきたのよ。この雛ひなは。
三男　だって、ぼくとふたりでだいじにしろつていつたつて、ねえさん、ぼくにいつた
じやないか。

長女　……………

三男　ぼく、手にのせて見たいんだよ。

長女 あれ、うそよ。

三男 なんだい、うそなことあるもんか。くにちゃんとこのおじさん、ぼくとなかよしなんだから。

長女 いいえ。うそよ。あたし、よし坊ちゃんを喜ばしてやろうと思って、うそいったのよ。ほんとうは、あたしだけにくれたんだわ。

三男 なんだい、ねえさんのうそつき。そんなら、そんなもの、殺しちゃうぞ。

長女 いやだわ、いやだわ。

三男 よこせ、よこせつてば。

長女 よし坊ちゃん、いやよ、そんな顔しちゃ。

三男 よこせつてば。ねえさんばか。あや子^{ひな}ばか。よこせつてば。

（女の子、策つきて箱から雛^{ひな}をとり出して病氣の子に渡す）

長女 ね、お願いだから、殺さないでね……あつ、いけないわ、そんなににぎつちやあ……こわいもんだから、足がぶるぶるふるえてるわ……もうはなして……よし坊ちゃん……もうはなしてよ、よし坊ちゃん……。

三男 ぼくの手にふるえが伝わってくるよ。軽いなあ。

長女

かあいそうだわ。足をもがいてるわ。そんなに持つてると、びつくらして死んじまうことよ。

(病氣の子そつと雛をもつたまま、長く見ている)

(女の子安心する)

長女

毛、やわらかいでしょ。

病氣の子、だまって雛をかえす。

女の子箱にしまつて、裏口から出ていく。

はやしの音が近づいてくる。

微風びふうの中から桜の花びらが病氣の子のわきに落ちる。病氣の子は動かない。

女の子入ってくる。

長女

おはやしがこつちへやつてくるかね。

三男

塩屋さんとこまでくるきりだい。あそこからまた帰つてしまふんだ。

長女

あの太鼓たいこね、おキンちゃんとのにいさんがたたいてるのよ。今年ことしはじめてだつ

て。

(はやしの音止む^や)

長女 あら、もう塩屋さんとこのまえまできたわ。あそこのしいの木の下で休むのよ。

三男 ……………

長女 (心細くなつて) かあさんもう帰つてらつしやらないかしら。よし坊ちゃん、ねむくない？ すこし風が出てきたわね。障子^{しょうじ}しめましょうか？

三男 しめなくてもいいや。

(このあたりから病氣の子の声、とみに衰える)

長女 でも、あたしなんだか寒いわ。裏のやぶがさわいでるわ。

(はやしの音、再びはじまる。そしてだんだん遠ざかっていく)

長女 あら、もう帰っていくのね。

(間)

長女 よし坊ちゃん。

(間)

長女 よし坊ちゃん。

三男 まだきこえるね、ねえちゃん。

長女 ええ、まだきこえるわ。もうじき、土塀^{どべい}の家の角^{かど}をまがると、きこえなくなるわ。ほら、もうきこえなくなつたでしょう。

三男 まだきこえるよ。

長女 でももう蚊^かが鳴くほだけよ。

(間)

長女 もうなんにもきこえなくなつてよ。こんどは、村のあつちのはしへいくのだわね。

三男 まだきこえるよ。

長女 あんたの耳の中に笛の音が残つてるんだわ。

三男 まだきこえるよ。

(間)

長女 なにをそんなにあたしの顔見てるの。いやよ、よし坊ちゃん。

三男 もうせん、ねえちゃんと花のかくしっこしたろう。

長女 いつのこと？

三男 ぼくが病気になるまえにしたよ。貝がらでふせて土の下にかくしたじゃないか。

長女 あ、そうね。あんときよし坊ちやんがかくしてきたの、あたしくらさがしても

見つけなかったわね。そして、よし坊ちやんが、あの日の夕方から病気になったから、あれきりになつたんだわ。どこへかくしといたの？

三男 裏のきんかんの木の下だよ。

長女 あら、よし坊ちやんずるいわ。かけひの向こうはやぶだから、いけないってきめてあつたじやないの。ずるいわ、よし坊ちやんたら。

三男 まだあるかなあ。

長女 あんなどこだれもほらなくてよ。あたし見てこようか。

（女の子裏口から出ていく。やがて貝のからを持って帰ってくる）

長女 あつたわ。かけひで洗ってきてよ。

三男 花はあつた？

長女 しなびてたわ。

三男 しなびてた？

長女 しなびるわよ、冬を越したんですもの。

三男 ぼくのかばんのお弁当入れるところにね、もうひとつ貝があるから持ってきて。

(女の子がして持つてくる)

三男 それ合わせてごらんよ。うまく合う？

長女 うまく合うわ。ほら、ちようどてのひらを合わせたみたい。

(それを病氣の子に渡す)

三男 まだ鳴るかなあ。

(口にふくんで弱々しくふく。鳴らない)

長女 土の中にあつた間に、どこかきつと欠けたのよ。

三男 鳴るよ。……じつときいてると、いっぱいになるよ。……風の音や笛の音がするよ。……たくさん音がするよ。どこか遠くの方へ消えていくよ。

長女 うそよ。なにもきこえやしないわ。

(病氣の子、貝をくわえたまま耳をすましている。間)

三男 ねえちゃん、……ぼくなんだか軽くなった。あ、ぼくもとんでくよ。風の音や笛の音の中をいっしょに……おかあちゃん……ああ、ぼくもとんでくの……。

長女 なにいつてるの、よし坊ちゃん。あんた、どこ見てんの。

三男 花びらや笛の音といっしょに流れてくの。

(女の子とつぜん恐怖にとらわれて立ちあがる)

三男 かあちゃん……。

長女 (さけぶ) よし坊ちゃん! かあさん! あたし、かあさんよんでくるわ。よし

坊ちゃん、待ってんのよ!

(女の子裏口からかけ去る)

三男 (弱く) かあちゃん……よし坊とね、鳥もいつしよにとんでくの。

(間)

(やぶのさわぐ音)

三男 (さらに弱く) かあちゃん……ぼく遠いの……。

いっそう、やぶのさわぐ音。

風の中から桜の花びらが落ちる。

病気の子の上に、かたわらに。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：渥美浩子

1999年7月4日公開

2006年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

病む子の祭

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>